慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	阿久津正幸君提出博士学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.1 (2006. 6) ,p.145- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060600-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

阿久津正幸君提出博士学位請求論文審査報告

論文題名　「マドラサの社会史―転換期（5／11―7／13世紀マシュリク）におけるイスラーム高等教育と学者ウラマーの対応」

論文の概要と審査要旨

「人間は研究や教育や講義によって、あるいは先生を手本としたり、先生と個人的な接触をもったりすることによって、知識も性格も、自分の主義主張も徳性もすべて習得することができる。しかし、先生との個人的な接触によって得られた習性は、なかでも一層強くしっかりしたものである。そこで師事する学匠の数が多ければ多いほど、身につく習性はより深く根ざすのである。」

これは、一四世紀前半、チュニスに生まれた中世イスラーム世界を代表する歴史家として有名なイブン・ハルドゥーンがその主著『歴史序説』の学問論のなかで述べている言葉である。これによく示されるように、イスラーム世界では早くから智、学問が尊重され、それを伝授、教育していくことに最大限の努力が払われてきた。イスラーム教徒にとって何よりも重要なのは、神（アッラー）の意志を知り、それにしたがって生きていくことである。これを真摯に実践していくためには、神の意志が凝縮されている『コーラン』に沈潜し、その意味を汲んで体現していくことが求められる。こうした営為のなかからコーランの解釈学が生まれ、それから派生し、補うものとしてハディース（預言者ムハンマドの伝承）学、神学、法学などの学問が発展し、壮大な知の体系が形づくられてきた。

しかし、このような伝統が古くからあったにもかかわらず、イスラーム世界ではある時期までこれらの学問をどこで、どのように教えるかについてはっきりとした決まりがなかった。学を渇望してやまぬ者は、それに通暁するすぐれた師を求めて広大なイスラーム世界の各地を遍歴し、その教えをモスクや師の私邸などであくまでもインフォーマルなかたちでうけながら、旅をつづけていくというのがふつうのあり方であった。

こうしたなか、イスラーム世界が大きく社会的に変化する一一世紀に入ると、バグダードをはじめとするイスラーム都市に忽然と学問を組織的に教授するマドラサと呼ばれる高等教育施設が相次いでつくられてくるようになる。阿久津君の学位請求論文は、このようにして出現してくるマドラサの建設事業を転換期における文化的所産としてとらえ、その意義を政治や社会との関係からとらえようとするものである。時代的には一一世紀末から一三世紀半ばの時期を中心に取り上げ、地域としては広域にわたるイスラーム世界のなかでもマシュリクと通称される東アラブの地域に的をしぼりながら、「教育の帯びるイデオロギー性を中東イスラーム社会に固有の仕組みから説明すること」に主眼をおいて執筆されている。論文の構成は以下の章節からなっている。

目次

凡例／図表リスト
序　論
はじめに　教育と政治・社会―マドラサ研究の中心テーマ
第一節　教育を見る眼―マドラサを媒介とするイデオロギー性の所在
第二節　知的創造性と政治・社会的含意―教育方法からの検討
第三節　教育財政―現実的問題からみた学問上の変化とウラマー
第四節　固有の法、固有の教育施設・制度―本論の仮説
第一章　研究史の検討
はじめに
第一節　イデオロギーの装置モデル
第二節　宗教的法学校のモデル
第三節　伝統重視・イデオロギー軽視モデル
第四節　教育の社会史の萌芽
第二章　紛糾するウラマー―6／12世紀アレッポのマドラサ建設とシーア派騒乱
はじめに
第一節　ザッジャージーヤ学院の創立
第二節　ヌール・アッディーンと初代教授
第三節　シーア派の反抗とマドラサの位置づけ
第三章　学習するウラマー―マドラサ時代の学術・教育活動の素描
はじめに
第一節　イブン・ハッリカーンのマドラサ入学
第二節　バハー・アッディーンの講義と学習履歴
第三節　学術・教育活動における口伝・口承と文字文化
第四節　マドラサ教授の師弟関係
第四章　批判するウラマー―イルムと報酬の問題
はじめに
第一節　学問と教育の理想
第二節　ニザーミーヤ学院時代のバグダードと二人のウラマー
第三節　教育者アブー・イスハーク・アッシラージーの権威
第五章　弁護するウラマー―クルバの社会学
はじめに
第一節　法学におけるワクフ制度の定義
第二節　誰が恩恵を受けるべきか
第三節　教育の再生産効果と法学派

結　論

原典史料

引用文献リスト

以下、各章の論述内容を要約しながら、その評価や問題点を述べることにしたい。

第一章「研究史の検討」は、欧米における代表的な先行研究を批判的な立場から紹介し、マドラサの研究史の問題点を指摘する。この研究に先鞭をつけたのは、G・マクディシーである。彼は純然たる教育史の観点から、マドラサをイスラームの諸学問のなかでも法学をカリキュラムの中心におく高等教育機関と規定した。しかし、これはヨーロッパにおける一二世紀ルネサンスの時代に出現した初期の大学とマドラサを安易に比較し、そこで養成されたユリステン（学識ある法曹階層）をイスラーム世界のウラマーにたとえるといったことによく示されるように、確実な史料にもとづく実証的な研究とは必ずしもいえない弱点をもっていた。

これに対して阿久津君は、マドラサをたんなる教育施設としてとらえることに満足せず、もっと幅広くそれをとりまく政治や社会との関係からマドラサが建設された理由、機能をみていくべきだと主張する。マドラサが時の政治イデオロギーと密接不可分なかたちで結びついていたことは、すでにハンガリーが生んだイスラーム学の泰斗ゴルドツィーハーによって唱えられているが、それはマドラサにおける教育の実態にはほとんど触れず、スペキュラティヴに提起されたものにすぎなかった。阿久津君はこうした先行研究を批判的に摂取しつつ、さらに近年、インフォーマルな師弟関係のあり方を重視し、教育の社会史的研究において新境地を開いたJ・バーキーの研究やマドラサを水平・垂直方向にのびる二つのネットワークを媒介する場とみるD・エフラットの考え方を取りいれながら、以下の各章においてマドラサの政治性、社会性について吟味をくわえていく。

第二章「紛糾するウラマー」では、一二世紀、シリアの都市アレッポにおいてマドラサの設立をめぐっておこされたスンナ派とシーア派の紛争を取りあげ、政治と教育、支配者とウラマーの関係を考察する。阿久津君は、都市紛争にまで発展したその対立の分析を通じて、外からやって来た軍事支配者と良好な関係を築いていこうとするスンナ派のウラマー集団と、そうでないシーア派の集団との対立が紛争の焦点であることを指摘する。支配者の側は、この対立を利用してみずからの立場を強化する一方、マドラサの設立を通じてそれに協力するスンナ派ウラマー集団を自分たちの側に取りこみ、また協力するスンナ派のウラマーたちもそれによって利益を得たという。

従来、アレッポでこの時期に数多くのマドラサがつくられた理由にかんして、アレッポを征服したセルジューク朝以後のトルコ系ないしそれに近い軍事的支配集団の「支配の正当性」を受け入れたスンナ派イスラーム教徒に対し、その見返りとして彼らを積極的に擁護していく復興政策がとられ、その一環とし

てマドラサが建設されたと考えられてきた。

しかし、こうした通説に対して阿久津君は、個々のマドラサの設立事情をひとつひとつ丹念に調べあげ、それを詳細な表に整理しながらマドラサが支配者の方から一方的に建設されたわけでなく、むしろシーア派に代わってアレッポで有力になっていくスンナ派ウラマーの側での主体的な努力がマドラサの建設につながっていったとみる。そこで教える教師の任免権、カリキュラムの編成などにおいてウラマーは世俗的な支配者が立ち入ることのできない力を有し、これがあったからこそマドラサという制度がアレッポというイスラーム都市で軌道にのっていったのだと強調する。また、マドラサの建設をめぐってしばしばスンナ派とシーア派の衝突がアレッポにおいて起こされたが、これは両派の教義の違いによるものでなく、むしろ世俗的な利害にかかわる新旧勢力間の抗争としてみるべきだという立場をとっている。

アラビア語の年代記・地誌に拠った以上の立論は、マドラサ建設を単純にスンナ派の復興政策とみる説に一矢を放ったという点で貴重である。ただ、世俗的な支配者とは一線を画していたといわれるスンナ派ウラマーの主体性の問題、スンナ派とシーア派の争いについてはもう少し詳細に史料を挙げ、零細な事実を緻密に考証しながら叙述していくことも必要だったように思われる。一一七三―七四年の争乱事件など興味ある事実も指摘されているが、史料上の制約もあってその記述があっさりしたものにとどまってしまったのは残念である。

第三章「学習するウラマー」は、アレッポにつくられたマドラサのなかで、スンナ派の四大法学派のひとつであるシャーフィイー派のそれをとりあげ、その学術・教育活動について論じる。これまでマドラサの教育内容・方法にかんしては、基本的な事柄であるにもかかわらず、史料の関係もあってあまり実証的に研究されることがなかった。これに対して阿久津君は、一二―一三世紀にこのマドラサで教え、学んだ二人のウラマー、バハー・アッディーン・イブン・シャッダードとその弟子イブン・ハッリカーンを取りあげ、その師弟関係、彼らをとりまく人脈を手がかりに教育の内容・方法の再構成を試みる。その拠りどころとなる史料は、近年、その重要性が指摘されているアラビア語で書かれたウラマーの人名辞典、伝記集である。

これからみえてくることは、マドラサという組織的な教育をめざす高等教育施設がつくられたあとでも、学ぶ者たちはそれに縛られず、自己の関心、好みに応じて師を求めて自由に移動し、複数のマドラサを渡り歩きながら勉学をつづけたということである。第一章の研究史のところで紹介したバーキーは、イスラーム世界の教育がマドラサ制度の確立後でもインフォーマルな関係を以前と同じように維持しながらおこなわれていたと述べるが、まさにこれと同じ状況がアレッポにはあったことが本章で指摘されている。

また、この章ではイスラームの学問を師から弟子へと伝えていく方法として、その基本となったのは口承・口伝であるというきわめて重要な指摘もされている。イスラーム世界にはコー

ラン、ハディースといった基本的な原典はいうにおよばず、神学、法学にかかわる万巻の書が残されている。これらの書の注釈を加えれば、その数、量は汗牛充棟のおもむきをなす。しかし、こうした状況に惑わされてマドラサの教育がテキストを使い、書かれた文字を通しておこなわれていたと一元的に理解すべきではない、というのが阿久津君がとくに力をこめて強調する点である。当時の人びとが重視したのは、コーラン、ハディースなどの原典を徹底的に暗記し、それを自己の知力にしたがって縦横自在に解釈しながら後の世代の者に伝えていくというやり方であった。

イスラーム世界ではマドラサの教育を通じて膨大な注釈書がこれまで生みだされてきた。しかし、元来、こうしたテキストは最初から書くことを目的に著されたのではなく、口承・口伝によって記憶され、相伝されたものが自然のうちに写本となり、注釈書になったのだと阿久津君は言う。これは知の継受についての斬新な問題提起であり、啓発されるところが大きい。これをさらに説得力あるものとするためには、マドラサに所蔵されている膨大な量にのぼる写本を系統的に調査していくことが必要である。

第四章「批判するウラマー」は、マドラサの設立にともなって、新たに提供された資金の受益者となっていくウラマーたちの間で、伝統的な価値観をめぐって動揺が生じたことが明らかにされている。イスラーム世界では昔から学問に志すものは教師であれ学生であれ、世俗的な利益、名利、報酬をうけないというのが美徳とされてきた。しかし、マドラサの制度が確立してくると、教師は報酬を受けとり、学生は食糧を支給されるなど財政的な援助をうけることが次第に一般的になっていく。この是非をめぐってマドラサが建設されはじめた直後に大きな論争がイスラーム世界の各地でおこされた。この問題について阿久津君は、時代と地域を一一世紀のバグダードを例にとって論じる。

この時代を代表するシャーフィイー法学派のウラマーとしてよく知られるアブー・イスハーク・アッシーラージーは、バグダードにあるマドラサ＝ニザーミーヤ学院の教授就任を要請された際、その廉直な志しを当初、貫き、その就任を拒否した。しかし、彼の下で学ぶ学生たちは、時が経つにつれて師のようなやり方では学問をつづけられないと不満をぶつけ、次々と彼のもとから去っていった。こうした事態に直面したシーラージーは、ついにやむなくかたくなに守り通してきた自己の信念を放擲し、ニザーミーヤ学院の教授職就任を承諾する。

この章ではこのようにマドラサをめぐって新たに経済的な問題が生じてきたことを検討しながら、当時のマドラサと社会との関係にメスを入れている。現代でも学校の維持、運営にとってそれを支える財政的基盤の問題は最重要なもののひとつだが、こうした経済問題が一一世紀のバグダードですでに生じ、関係者のあいだで議論になっていたという指摘は新鮮であり、評価されるべき点である。

第五章「弁護するウラマー」では、第四章のマドラサ初期の

苦悩するウラマー像から一転して、マドラサ建設がさかんになり、支配者層が積極的にそれに資金を提供するようになった一二世紀後半から一三世紀の時代を取りあげ、支配者層からの資金提供、ワクフとして知られる慈善信託制度にもとづいてマドラサが運営されていくことをウラマーたちがどのように受け止め、自分たちの論理、すなわちイスラーム法学の論理で、いかに正当化していったのかを論じている。また、そのようにして提供された資金をウラマー層のなかの特定の集団、とくに法学派が優先的に独占する仕組みがつくられていったことが指摘される。

ワクフの是非を論じるにあたって年代記、伝記集のほかに法学文献、とくにファトワー（法勧告書）を使っている点は、斬新で有効である。しかし、一四世紀以降拡大する公的な「国庫ワクフ」をめぐる議論にまで立ち入ってしまったことは、いささか手を広げすぎたという感が否めない。ここはあくまでも私的ワクフに限って系統的にそれに対するウラマーの考え方をあとづけるべきだったと思われる。また、ワクフの制度が確立する以前において、ウラマーたちにイスラーム諸王朝から支給されていた俸給に代わる「リザク rizaq 地」についての法的議論をワクフとの比較ですればさらによかったと思われる。

最後に結論として、マドラサが最初に設立され、その後、拡大していく過程で、ワクフなどを通じて経済的な利益を得るようになっていくウラマー層は、利得の是非をめぐって葛藤があったものの、次第にみずからの目的や価値観に反しないマドラサという存在を積極的に承認するようになった。その後、マドラサの建設がさかんになると、そのための資金提供の方法についてもイスラーム法に矛盾しないよう新しい法理論を組み立て合法化していった。一方、資金提供者である支配者層にとっても、ウラマーが認める方法でマドラサを建設し、運営を任せながら彼らの協力を誘導することができた。マドラサのイデオロギー性はまさにそこにあったのだと阿久津君は結論づけている。

以上、各章ごとの要約を述べ、それぞれの問題点について指摘してきたが、最後に全体的な講評をしておくことにしたい。阿久津君の論文は、一九九〇年代以降、さかんになってきたイスラーム都市社会史研究、その一環としておこなわれている教育社会史研究の成果を貪欲に吸収し、時代と地域を広く取ることによって多くの問題点に論及した意欲的なマドラサの社会史研究になっている。とくにマドラサがワクフ制度との関連で大きく経済的に変化していくさまをあとづけた部分はオリジナリティーに富み、マドラサ研究に一石を投じる研究と評価することができよう。

しかし、全体として時代、地域を変えながら議論を進めるという体裁をとっているため、個々に取りあげた事象が展開する地域、都市社会、時代が必ずしも十分に描きこまれていないというらみは否めない。アレッポ、バグダードなどの特定の中世アラブ都市にしぼり、そこでのマドラサを軸とした教育、学術活動のミクロな実状についてより濃密な社会史的記述をした

ならば、中世アラブの教育社会史にかんするこれまでの欧米の先行研究を本当の意味で超えることができたのではないかと思われる。しかし、違った見方をすると、本論文は、将来さらに深めかつ高めていくべき、そのような研究の基本的な方向性と適切な方法を、そして有効な史料を具体的に提示しているという点では高く評価できる。

このように本論文にはいくつかの要望すべき点が残されているが、後期博士課程の修了者に与えられる学位としての学術博士号の要件、すなわち専門的な研究者として自立できるだけの訓練、能力、学識という点からみて阿久津君の提出論文はそれに十分に耐えるものだと判断する。さらに、研究の独創性、その成果が研究上、新しい知見を加えているという点からみても阿久津君には自立した研究者としてそのスタートラインに立つ資格があると考える。こうした諸点に鑑み、審査員一同は、阿久津正幸君に博士（史学）の学位を授与することが適当と判断するものである。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学　文学部教授　坂本　勉
副査　慶應義塾大学　商学部教授　湯川　武
副査　慶應義塾大学　文学部助教授　長谷部史彦

石神裕之君提出博士学位請求論文審査報告

論文題名　関東地方における近世庚申塔の考古学的研究

論文要旨

石神裕之君提出の博士学位請求論文「関東地方における近世庚申塔の考古学的研究」の内容は、以下のように、序章と終章とを含め、合計一〇の章からなり、総ページ数は二〇六である。

序章　近世庚申塔研究の目的
第一章　近世庚申塔研究の歴史と視座
第二章　近世庚申塔研究の型式学的分析
第三章　近世庚申塔の主尊に対する考古学的分析
第四章　近世庚申塔にみる施主名称の史的変遷
第五章　近世庚申塔にみる造立期日銘の検討
第六章　武蔵国荏原郡馬込村の庚申塔施主
第七章　近世庚申塔の造立習俗の展開と村落社会の変化
第八章　近世後期の庚申塔にみる石造遺物の盛衰
終章　近世庚申塔研究の地平

本研究は、近世村落の歴史と密接な繋がりをもつ庚申塔を、主に考古学的な立場からその資料性を整理、分析し、それによって得られた知見を、同時代の文献史料や民俗学的研究が示す結果などと対比させて議論したものである。つまり、庚申信仰